

【悪魔】 新政権が選挙時から主張していた「子ども手当」には、賛否両論あるようです。あれだけの数の当選者が出たわけですから、政策への支持も多いのかと思っていました。反対意見も強く言われているのはなぜなんですか？

【天使】 今のところ、反対論の一番の根拠は、財源確保の見通しが明確でない、という点にあると言って差し支えないだろう。今回提唱されている子ども手当は、所得の多少にかかわらず、15歳以下のすべての子どもの保護者に一律に子ども1人当たり月額2万6000円を支給する、というものだから、財源としても兆単位のものが必要となり、昨今の財政状況からすれば、他の予算を削る必要が出てくるのが避けられない。

従来の予算の無駄を省くと政府は主張しているが、必ずしも十分な財源が確保できていないとの印象が拭い切れず、反対論が活性化する原因となっているように思われる。

【悪魔】 確かに、お金がなければ手当は払えないですから、財源の問題は大事だと思います

悪魔と天使の 法学入門

筑波大学准教授 星野 豊

第33話

子ども手当と 子育て支援政策

けど、それは受け取る側である国民の問題ではないでしょう？ 例の定額給付金の時だって、実施される前には賛否両論ありましたけど、結局ほとんどの人は受け取ったわけで、国家財政のために放棄する、という人はあまりいなかったわけですね。だとすると、子ども手当に反対、という意見には、もっと別の理由があるんじゃないありませんか？

【天使】 国民の側の問題を取り上げるのであれば、子ども手当の実施は必ずしも国民全体に利益を均霑するものでない、という分析がなされていることも重要だ。子ども手当の実施に伴って、従来行われていた扶養控除や児童手当は廃止される方向で検討が進められているが、そうだとすると、子ども手当として支給される金額がそのまま家計の増収となるとは限らない。まして、子どものいない家庭や、子どもが15歳を超えている家庭では、結果として増税となるわけだから、反対意見が根強く主張されることも、十分理解できるものではある。

【悪魔】 それは理由になっていませんよ。ど

んな政策だって、誰かが得をして誰かが損をする仕組みになっているわけですから、自分が損をするから反対、では意見として説得力がなさすぎます。第一、これまでの制度では、子育てに必要な費用は基本的には個々の保護者が自分のお金から出してきたわけで、ほとんどの人が子どもを育てていたから全員の負担が大体平等になっていた、ということでしょうか？

要するに、子育てをしない方が得になる制度が今まで取られてきたわけですけど、それが子どもの数が少なくなってきた最大の原因じゃないませんか？ 子どもを社会全体で育てる、そのために一番苦勞の多い子どもの保護者を支援する、という今度の政策は、長い目で見ても健全だと思えますがね。

【天使】 そもそもその話として、一律に、かつ保護者に直接現金を支給する、という政策自体に対して反対意見が根強いことも否定できない。政権内部でも様々な見解があるようだが、例えば、保護者に直接現金を支給することが、果たして子どもの利益にかなっているのかどうか、それよりも、子育て支援のための設備や体制を



調える方に予算を振り向けるべきではないか、という意見も見受けられる。

【悪魔】 要するに、保護者に金を渡したら変なことに使ってしまうんじゃないか、ということですよ。でも、これまで子育てに必要な費用をほとんど保護者に支払わせておいて、子ども手当の使い方を疑うのは、はっきり言うてどうかと思えますよ。それに、子育て支援のための設備や体制、というのは、一体何を指しているんですか？

一番多くの人が思いつくのは、子どもを預けられる保育園や学童保育施設だと思いますけど、そこに預けるための費用を保護者はさらに稼がなければならぬわけですから、働いている保護者が子育てから解放される、というだけですよ。そうだったら、手当という形で現金が入ってくる方が、保護者が子どもと一緒にいられる時間が少しでも増えてくるわけで、「子育て」には一番望ましいんじゃないでしょうか？ 「子育て支援」と言うときに、保護者の就労のことばかり考えるのは、どこか視点が偏っているように思えますけどね。